

編集後記

巻頭にも書いたように、この特集号は思いがけない機縁からでき上がった。講師の方々には随分と無理な方法で原稿をお願いしたことになって大変に恐縮している。しかし出来上ってみると一応面白い読物としてまとまったのではないかと考える。

潰瘍と癌の関係は何時も古くてかつ新しい。ことに早期胃癌を材料にしてこの問題を論ずることは、開闢以来なかったはずのことで、その意味では断然新しい取扱い方である。しかし新しい材料がつけ加わるにつれその結論も大きく揺れ動く。当分の間私どもはその揺れの中に漂わなければなるまい。

シンポジウムのあとで、癌研の吉田先生からこの企ては大変に面白いから毎年1回自前でやるようにしたらどうかというお話をいただいた。恐らく毎年やってもそうそう問題点はあるまいと思われるが、ポリープと潰瘍とを交互にやっていけば立派な催しになるのではないかという気がした。しかし何れにせよ内科側のデータと、外科病理側のそれとがこのような違っていても、当分の間結論に達することは不可能なような気がする。潰瘍なり、ポリープなり、あるいはその他の癌前駆病変が、臨床的に認められるような形に成長するには、恐らく10～20年、場合によってはそれ以上の月日が必要であろうと思われる。結局はその経過を待たなければ何とも言えないというのが本音ではあるまいか。ともあれこの企てがこの研究の進歩の一里塚になってくれたら幸甚この上もない。

<村 上 忠 重>